

講義題「各教科等で条件を付けて読み書きする力の育成」

(1) 言語活動を充実させる意義

- この「条件を付けて読み書きする力」がめざすところは、子どもたちの主体的な思考力・判断力・表現力を高めることである。それが言語活動の充実である。
- 国語科だけでなく、各教科等において言語活動を充実させなければならない。
- 文部科学省「言語活動の充実に関する指導事例集」に、「一斉授業だけでなくペア・付箋・ホワイトボードを使って話し合う」「先生が説明するだけでなく、児童が説明する」「ポスターセッションで説明する」「立場を決めて討論する」等を紹介している。これは国語科だけでなく、各教科等において実施することとしている。しかし、小学校では、これまでもこうした学習はすでに行われている。
- 小学校がさらに求められるのは、ただ単に発表したり、話し合わせたりすればよいのではなく、条件を付けて話し合わせることである。
- 保健体育のボール運動の授業で、作戦会議をさせる際になかなかうまくいかないことが多い。どのような条件を踏まえて話し合わせなければならないか。どんな特徴をもった話し合いになるのかを考えなければならない。
- 作戦会議では時間がないのだから、短時間でねらいに基づいて、前のゲームを振り返り成果と課題を共有して、次のゲームに向けて意思決定をしていかなければならない。30分以上作戦会議をするわけにはいかない。
- 子どもたちに思考・判断をさせるときに、「何でもよいからただ振り返りましょう」ではなく、〇〇分以内で、こういうことを振り返りましょうという、条件を踏まえて話し合わせる事が重要になる。
- その言語活動が、子どもたちのどのような思考力・判断力・表現力にどう結び付くのかということを明確に押さえたうえで、授業を展開することが大切である。

(2) 学習指導要領における言語活動の趣旨と育成すべき資質・能力

- 学習指導要領第1章総則第4の2に、言語活動を充実することの趣旨が書かれてある。ただ言語活動を活発にするのではなく、各教科等のねらいに応じて、児童生徒が主体的に思考・判断し、表現できるようにすることが大切。
- 一体なぜ言語活動を充実させなければならないのか?「教えなければならないことがたくさんあるから、知識を覚えさせるのだ」という姿勢だけではなぜいけないのか?
- 子どもたちにただ知識を与えれば済むのではない。2011年の東日本大震災で顕在化したように、誰かが正解をもっており、それを与えられるまで待っていれば問題が解決するという時代ではなくなった。こうした時代を生きる子どもたちに必要な力は、自ら課題を発見し解決する力、他者と協働するためのコミュニケーション力、物事を多様な観点から論理的に考察する力などである。
- だから、授業の中においても、子どもたち自身が課題を発見し、その課題を協働して解決していく力を養わなければならない。また、1つの方法ではどうしても解決できないときに、異なった方法を考え出す能力をめざすために言語活動の充実を図る。
- 育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会において、検討された育成すべき資質・能力は、与えられた知識を覚えてペーパーテストが完璧にできるというものではない。「主体性・自律性に関わる力」「対人関係能力」「課題解決力」「学びに向かう力」「情報活用能力」「グローバル化に対応する力」「持続可能な社会づくりに関わる実践力」特に「受け身ではなく主体性をもって学ぶ力」こそが必要となる。こうした力は21世紀型能力と呼ばれている。

○育成すべき資質・能力に対応した教育目標・内容は、以下のものである。

- ①教科等を横断する汎用的なスキル（コンピテンシー）
- ②教科等の本質に関わるもの
- ③教科等に固有な知識や個別スキルに関するもの

（3）言語活動を充実させる授業づくりのポイント

○では、どのように言語活動を充実していくか。端的にいえば、授業改善の方策であるということが言える。

○課題としては、以下の三点が挙げられる。

- ①指導のねらいと言語活動との関係性がはっきりしにくい。
- ②何が指導のポイントか、どのように指導すればよいか分かりにくい。
- ③評価がしにくい。

○言語活動の充実を拠点とした授業改善の4つのステップは、以下の四点である。

- ①付けたい力（指導事項）を見極める。
- ②付けたい力にふさわしい言語活動を位置付ける。
- ③言語活動が子どもたちの課題解決となるようにする。
- ④思考や判断を促す発問や指示を具体化する。

○付けたい力があいまいになりがちである。「カブトガニを守る」という文章の要約をするときにも、ただ字数だけの条件で要約しましょうというだけでなく、どのような目的や必要に応じて要約するかという条件を付けて要約させることが大切である。

（4）国語科における言語活動の充実

○学習指導要領では、C読むことの指導事項に「目的や必要に応じて、文章の要点や細かい点に注意しながら読み、文章などを引用したり要約したりすること。」とあるので、文章の中のどこが大事かというのは、読み手の目的や必要に応じて変化してくる。

○例えば「大事なことに線を引きましょう」や「気持ちのわかるところに線を引こう」と言うと、たくさん線を引いてしまう子どもが見られる。そこに子どもの主体的な思考判断、目的意識、必要感はない。「自分のお気に入りのところやぐっとくるところに線を引こう」と問えば、子どもの主体的な思考・判断が生まれてくる。

○教師が資料を与えて考えさせるだけでなく、それをどう活用するか思考させることが必要。様々な条件を付けて読んだり書いたり話し合ったりさせる。

○付けたい力にぴったりの言語活動を位置付ける。指導事項B書くことE「文章を読み返す習慣を付けるとともに、間違いなどに気付き、正すこと。」があるが、この推敲の力を付けたいときに、「日記」がいいか「手紙」がいいか、どちらの言語活動を選ぶだろうか。やらされて推敲するのでは、あまり意味がない。そのためには、言語活動の特徴を分析することが必要。

○日記は主として自分に向けて書いている。手紙は相手に読んでもらうために書くものである。主体的に推敲する力を付けるためには、「手紙」の方が有効である。

（5）各教科等における言語活動の充実

○家庭科で整理整頓する前の様子から課題を見付けて、その課題を解決していく過程を考えさせてまとめさせる言語活動を行っている事例がある。「自分の生活を振り返りましょう。」「その中で課題を見付けましょう。」「どうやったら解決できるか考えましょう。」「そしてそれを文章でまとめましょう。」という言語活動をさせた。

- その教科の指導のねらいに合致して、子どもたちの必要感や必然性をもたせたときに最大の効果を発揮する。
- 理科では、問題解決のプロセスが非常に繊細な教科である。その問題解決のプロセスの中で、条件を付けて読み書きする場面は2つある。観察・実験の前と後である。この2ポイントは言語活動の充実で特に重要である。
- そのときに「観察・実験の結果にわかったことについて話し合おう」だけでは、もったいない。前と後では、条件が違って来る。観察・実験の前の仮説や予想については、広げるような話し合いになる。観察・実験の後では一つの方向に収束させる話し合いになる。
- 体育では、言語活動の充実については、運動と運動の間にある作戦会議がその場となる。その作戦会議において、普通の話し合いではなく、ホワイトボード等を使った話し合いが有効である。
- 大切なことは、まずねらいをきちんと明確にして、的確な支援を行い、話し合う条件や状況を作り出し、子どもが思考・判断しやすいようにして学習を進めていくことである。
- 調べ学習においては、教師が必要な資料を全部与えてはよくない。それをすると子どもはいつも資料を待つようになる。
- 付けたい力を見極め、最終的に自力で解決できるような言語活動を位置付ける。そのためには中盤でどのように展開すればよいか、序盤でどのように提示すればよいかを考えていく。単元の後ろから逆算的に指導計画を考えていくとよい。
- 日々子どもたちが主体的に思考・判断を行う授業改善が必要。そのためには、言語活動を付けたい力を踏まえて位置付け、思考・判断・表現できる場面を作る。そして高学年だけでなく、低・中・高それぞれの発達段階を踏まえて、子どもが主体的に思考判断し、きちんと条件を付けて読んだり書いたり話したりする活動を計画的に行うことが重要。
- ただ自分の考えを説明するだけでなく、他の友だちの考えと比較して違いを説明することも重要である。

(6) 校内研究での各教科等における「言語活動の充実」と学習評価の進め方

- 校内で、言語活動の充実に向けた共通理解をしてそれを研究していく。小学校であれば低・中・高で力を入れる言語活動の充実に向けた学習形態等（ペア学習）を決めてそれを研究していく。それを様々な教科等で実施していく。ただペア学習をさせるのではなく、学年の発達段階における条件を付けて行わせる。
- 授業研での学習指導案にも、当該単元に位置付ける言語活動とその特徴、そしてその言語活動が目標にどう結び付くかをしっかりと記述しておくことよい。「まとめる」「交流する」「考える」「深める」といった学習活動を、思考や言語操作が明確になるように具体的に記述する。
- 事後研において大事なことは、以下の4点である。
 - ①授業参観前に、ポイントとなる言語活動の場と具体的姿を共通理解しておく。
 - ②そのポイントとなる言語活動の場面の具体的発話や記述を切り取って記録する。
 - ③その記録やノート記述などをもとに協議をする。
 - ④当該教科等の「学習指導要領解説」を持参して参加する。
- 評価の観点を整理する。①関心・意欲・態度 ②技能 ③思考・判断・表現 ④知識・理解
この四点であるが、以前は、思考・判断のみであった。しかし思考・判断はそのままでは評価することが難しいので、思考・判断させたことを表現させることによって評価を行いやすくした。
- 言語活動の充実を踏まえた学習評価のポイントは以下の三点である。

ポイント①目標に準拠した評価・・・指導のねらいをまず明確にする。

ポイント②精度の高い評価規準設定・・・各教科等の「思考・判断・表現」に対応する観点を中心に。

ポイント③指導過程の改善・・・児童生徒が主体的に思考・判断し表現できる指導過程を構築する。

○思考・判断・表現を評価する場合、ただ単に活発に言語活動が行われたかどうかだけではなく、その言語活動の中に、児童生徒のどんな思考・判断・表現が埋め込まれているかを確実に捉える事が大切。国立教育政策研究所「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」を参照する。

○明日からできる言語活動の充実のポイントは以下の三点である。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">①自ら課題や資料を選ばせる。②自分の考えを解説させる。③必要な条件を踏まえる。 |
|---|

○必要な条件というのは2つの意味があり、1つは教科等の本質に迫る条件、2つは子ども自身の課題解決に必要な条件を明確にする。ちょっとしたことでよい。例えば、「今日学んだことを書きましょう。」ではなく、「今日学んだことを、お家の人によく伝えるように、これが一番おもしろいなということを入れて書きましょう。」
「自分の考えを具体的な例を1つだけ挙げて書きましょう。」というような、ちょっとした日常的な児童生徒の主体的な思考・判断を促す活動、最終的に生きる力を育むための活動を仕組んでいただきたい。